

「娘さん、お前の名は房江といふのだね。」

「はい。」

「今年幾歳になるの？」

「八歳なのよ。」

「やつぱり八歳。」と、雪江は何だか娘の房江に邂逅したやうに抱き寄せて「恰度、妾にもお前さんのやうな年頃の娘があるんですが、今は何處に奈何してゐるか解らないんですよ。」

「えッ。」と、武村男爵は舌打ちして「那樣事を此の場合云つてゐては困る、これは盗人ちやからの、早く私に引渡して呉れ、交番へ連れて行くのぢや。」

「お父様、妾は此の娘が那樣淺猿しい事をしないといふ事を保証い

たします、一體、貴所は幾らのお金が紙入に入つてゐたのでござい
ます。」

「金は五十圓ぢやがの。」

「ではお金さへ貴所の手にもどつたら宜いのでございませう。」

「まア〜さう云へば爾うぢやの。」

雪江は領いて紙入から拾圓の紙幣…五枚取出して「さア娘さん、妾、お前の花を買ふて上げますから、此のお金を此のお爺さんに返してお上げなさい。」

「だつて叔母様、妾、人の物なんか取らないんですもの。」

「其れは能く解つてゐますけれども面倒ですから兎に角此のお金をお進げなさい。」

「では叔母様、恁麼お金を貰つても好いんですか。」
 「宜うござんすとも。」

房江は金を受取つて武村の前に黙つて差出した、而も罪のない者に難癖をつけられた口惜さが小供心にも残念と思つたか、其の手はブルとく顔へてゐる。

武村は五十圓の金を受取つて洋服の衣兜に入れやうとして偶と紙入が其處にあつた事に氣が注いた。

「や、紙入が此處にあつた。」

「それ御覽なさい。」と、雪江は父を嗜め顔に鋭く云つて「ですから貴所のやうに餘り人を疑ふもんぢやございませぬわ。」

「イヤ濟まんく、而し折角ぢやから雪江五十圓は別に私の小遣に

貰つて置かう、は、は、は。」

「まア。」と、雪江は云つた切、呆れて言葉はなかつた。

やがて都築家の小間遣は此處へ来て、武村のゐるのを知つて何やら話をしてゐたが、武村は一緒に立去つた。

これを見送つた雪江は房江の顔を情々と眺めてゐたが「ア、氣の所爲か知らないが、奈何して恁麼に似てゐるんだらう。」

ふと此の一言を小耳に差挟んだ房江は怪訝顔をして、

「叔母様、妾、誰に似てゐるんです？」

「お前さんはね、妾の昔の良人、穂積と云ふ人に似てゐるんですよ」

「穂積。」と、反覆した房江の眼はキラ／＼と輝いたが、チラと父の方眼を反らして「穂積何と仰有るの？」

「おやお前さん何か心當りでもあるのかい、あのね、それは穂積守雄といふ華族様なの。」

「可笑しいわねえ、妾のお父様も穂積守雄といふのよ。」

「えッ」と、雪江は悸乎として房江を抱寄せたが「それぢや仍且お前は妾の娘の房江に違ひない。」

「あの叔母様は妾のお母様。」

「爾うです、お前のお母様ですよ。」

「嘘だわ、妾のお母様は死んで了つたんだもの。」

「いゝえ全く妾はお前のお母様ですから、お父様に聞いて御覽なさい。」

房江はうれしさに煽られて行成守雄の傍へ馳けて來た。

「お父様、あの叔母様、妾のお母様。」
「イヤ違ふあれはお前のお母様ぢやない、鬼ぢや〜、お前の肉も骨も喰ふ鬼ぢや。」

雪江は馳寄つて守雄の變り果てた姿を凝平を見成つたが、やつと合點したらしく「貴所。」

「えッ」と、守雄は雪江を刎退けて「寄るな〜汚はしいッ」

「お父様、叔母様はやつぱり妾のお母様でせう、えお父様。」

「違ふ〜あれは薄情者といふのだ。」

「では薄情者のお母様。」

「おゝ房様、ゆるしてお呉れ。」と、雪江は溜らなくなつて寄らうとしたのを、折柄、ツカ〜と出て來た良人の都築はハタと遮つて、

「雪江、見つともない事をするな。」

響

二八 嫉妬

今日まで耐えに耐えてゐた都築は、見舞に往かうとしたのに、却つて歸京をした雪江の氣儘によつて、最う忍耐する事が出来ない程腹が立つた、而しながら往來では見つともないから、胸を撫でさすつて歸宅をした。

響

いま小間遣が自分の部屋へ茶を汲んで來たのを好き機會にして、「おい雪江は奈何してゐる？」と、口を切つた、聲は穩かであるけれども、不平を現はす顔の色が凄く眼は血走つてゐる。「は、はい。」と、主人の顔色を怖る／＼窺つた小間遣は稍躊躇したが「只今……お部屋にいらつしやいます。」

響

「俺が用があるからと云つて此處へ来るやうに云つて呉れ。」
 「はう。」

小間遣は徐かに立去つた、しかし雪江は來ない、都築は業が煮えてならぬので、机の上なる呼鈴をけた、いまいしく鳴らした、唯、女中の返辭する聲ばかりが聞えて、誰も來る容子もない。

雪江は一生懸命に机に凭れて齧き込んでゐるから、良人が自分の冷酷なるにひどく立腹してゐる事が解らない、尤も小間遣から其の通信はあつたが、穂積の事や房江の事ばかりが頭腦に浮び、眼にちらつので他の事は一切空であつた。

果して耐え切れない都築は寤音荒々しく雪江の部屋へ入つて來た
 「雪江、何故お前は來ないんだ。」

雪江はぢろりと良人の相好の顔を眺めたが、手を額に宛た許り顔を反けて机の上へ突伏して了つた。

「おい雪江、何故お前は返辭をしないのか。」

「貴所。」と、やつと良人の方に顔を向けた雪江は、奈何にも煩さうに「妾は氣分が悪いのですからどうか口をお利きなさないで下さいまし。」

「お前は那樣勝手氣儘な事ばかり云つてゐて其れで良人に對する妻の義務が立つと思つてゐるのか。」

「那樣事は仰有らなくつても能く解つて居ります。」

「奈何わかつてゐるんだ。」

「もとより妾は貴所に冷やかちやありませんか、それを貴所は御承

「知で妾をお迎へ遊ばしたのぢやございませんか。」

「そりやお前の不貞腐れといふもんだ、私はどうかしてお前に私の親切な事を見せて冷やかなお前に暖かい情が湧いて来るのを指折つて待つてゐたのぢや、其れにお前は知らぬ顔をして飽までも我を通さうとは實に情ない女だぞ。」

都築は曾つて恚歴厭味な愚痴を云つた事はなかつたが、あまりと思つて平素思つてゐる事を打明けた、而し雪江は更に感じない、唯、心に浮び眼に見えるのは戀しい穂積親子の事ばかりである、良人に對して冷酷なのは妻の不貞であるが、これとて素より父の慘酷が來したので雪江には罪すべき事はない、唯、氣の毒なのは武村の手段に陥つて自ら懊惱と苦悶を求めた都築である。

「雪江、お前は奈何しても私に忠實に、貞節な妻となつて呉る事は出来ないのか。」

「出来ません。」

最う此の一言は鐵よりも堅固な雪江の決心を示したもので、都築の胸には愛の運命から死の宣告をうけたやうな感があつた。で顔色は一層凄く變つて來た、手も體もブル／＼と震へて來たと思ふと、俄破と立つて雪江の襟際へ其の猿臂がかつたと思ふか早い、雪江は其の膝下に捻伏せられた。

「貴所、何を亂暴を遊ばす。」と、雪江は力任せに刎退けやうとしたが、仲々力及ばないので組布かれた儘である。

「雪江、お前は他に愛を濫ぐ男があるんぢやらう、私の眼を掠めて

貴様は不義をしてゐるんだらう、その人間も畧ぼ俺は承知をしてゐるんだ、ウヌ不貞な女め。」

將に満身の怒をふくんだ鐵拳が雪江の頭上に落ちんとした時、此處へ入つて來たのは雪江の父の武村男爵であつた。

「これ、都築さん何をなさる。」

「おつお父様。」と、都築は其の手を止め感慨無量の涙がホロ／＼と散る雫のやう、雪江は忍び音に泣いてゐる。

二九 かくれ家

その後、雪江は人目を忍んで中央停車場に行つて穂積親子に會はふとしたが、最う二人の姿は眼に止らなかつた、で小間遣をやつても見、又、腹心の者を使って探させたが解らない、唯、親子の者は都合あつて桐ヶ谷附近の破れ寺にかくれてゐると云ふ頗る便のない消息を得た。

冬の日には寒く雪は降つゞいだ夕暮近い頃、雪江は良人が父の武村と共に、銃獵に赴いたのを好機會に、外套に身を堅めてワザ／＼桐ヶ谷の破れ寺をおとづれた。

満目白皚々、人の往來さへ最う少なくなつたので、何だか體がゾク

くして怖ろしさと穂積親子の戀しさが頭腦の中で紛糾になつて、とぼくと雪のぬかるみを辿つて行くと、果して破れ寺が半ば雪にうづもれて建つてゐる。

寺内へ入つて往くと、廂は傾き柱は歪んだ鐘樓の下で、二人の學生が休息をしてゐるから、

「もし一寸伺ひますが、此の邊に穂積といふ人が住んで居りませんか。」「でせうか。」と、覺束なくも問ふて見た、すると、二人の學生は氣味悪氣に、

「僕は知りません。」と、一人が口を切つて更に眼で暗示をして足早にサツサと行つて了ふ。

雪江は當惑してゐると、誰か鐘樓の蔭から小さい兎音をさせて、

破れ傘を振かざしながら出て來た者がある、やつと心強く感じた雪江夫人は寄つて行くと、その者は雪江の顔を見るや、

「や、薄情者のお母様。」と、叫んで走り寄つた、これは果して雪江の探す房江であつた。

「お、房様。」と、雪江は轟と房江を抱寄せて少時は無言のまゝに泣く許りであつた。

すると、やがて房江は氣が注いたやうに雪江の傍を離れて、

「叔母様、あなた本統に妾のお母様。」と、顔を覗きながら云ふ。

「爾うです、お前を生んだのは妾ですよ。」

「だけでもお父様は誰だつて云つてよ、何故々々、え叔母様。」

雪江は何と云つて此の無邪氣な人に、自分が眞實の母である事を

説かうかと考へた、けれども、それと同時に穂積が此を打消すべき深い印象を房江に與へてあるから、それを打破するには仲々の困難である。で少時、兎つ角つ黙つてゐると、

「ね叔母様、妾は毎晩叔母様の事を夢に見てゐるのよ。」と、悲しきうに、いちらしくも云つて退けた。

雪江は溜らず抱寄せて「最もです、妾だつて毎日お前様の事ばかり思つて泣いてゐるんですけれども、お父様は妾をお前のお母様と云はせては呉ないんですから。」

「どうしたの、ね叔母様、妾、お母様と呼びたいわ。」

「おゝ。」と、雪江は感極つて泣顔れて了つたのである。

房江は何か考へてゐるやうな容子が見えたが雪江の顔を覗いて、

「ね叔母様、妾、お父様にお願をしてお母様にして貰ひたいわ、叔母様、どうしてお父様はお母様と呼ばせないの？」

「あのそれはね……。」と、雪江夫人は溢れ落る涙を拭いて、妾はお前やお父様を捨てた鬼だからです、けれども妾は好き好んで鬼になつたのぢやありませんよ、妾のお父様が妾を鬼にしたのですから、どうか妾を怨まないでお呉れよ。」

「ではお祖父様が……。」と、下を伏目で見てから、更に雪江の顔を見成つて「お祖父様つて、あの白い髯の怖い叔父様の事？」

「あ爾うなんですよ。」

「でも可笑しいわねえ叔母様。」

「何故です。」

「お父様は叔母様を鬼だつて、貴女は叔父様を鬼だつて、何方が本統の鬼かしら？」

雪江は堪り兼ねてワツと泣倒れた。房江は雪江夫人の腕に縋つて、「叔母様、雪が充満附くから可けないわ、妾ね、お父様の處へ行つてお願ひをして来るわ。」と、房江は小走りに鐘樓の方へ駆けて往かうとしたが、それより早く父の穂積守雄が姿を現はして、「これ房江何處へ行く。」と、呼掛けた、雪江は其の聲が鋭い洋刀で胸を刺貫かれるやうに耳に響いて俄破と起きあがつた。

響

三〇 鐘の響

「あ、お父様。」と、父の姿を視て馳寄つた房江は嬉げに「あのお母様ではない……停車場でお目に掛つた叔母様がいらつしやるわ。」雪江は守雄の傍へ寄つて往つたが、穂積は房江を後に圍ふやうにして後退りをした。

「貴所。」と、雪江は力を籠めて呼んで「妾、今日は決心をして参りました。」

「何事も今更云ふ必要はない、さあ歸れ、此の通り降つもる雪よりも美しい親子二人の心が貴様のやうな汚れた畜生があると、自然に汚れる、清浄な寺内を鬼めが汚すと、無縁の佛が怒り狂つて、貴様

響

の體は紅蓮の炎に葬られるだらう、歸れッ。』

『いゝえ妾は歸りません、身の潔白を立てない中は何と仰有られましても歸りません。』

『好ッ、それなら勝手に雪にうづまつてゐろ、其の淺猿しい汚れた體を狐や狸の餌食にするが好い。』

守雄の聲は凜として犯すべからざる調子である。房江は怖るゝ父の顔を覗いて、

『ね、お父様、どうか〜彼の叔母様の悪い事は妾が謝りますから勘辯して進げて頂戴、而して妾のお母様と云つても好いでせう。』

『えつ。』と、打消すやうに、叱るやうに、守雄は房江を戒めてから『彼様奴の傍に寄るんぢやないぞ、彼奴は鬼だ、お前の體を喰ひに

來たんだ。』

『でも妾、彼の叔母様をお母様にしたいんだもの。』

『房江、まだ那樣事を云つてお父様の云ふ事を聞かないと、お父様の子ではないぞ。』

房江はホロ〜と涙を滴して情なげにシク〜と泣く、雪江は一層悲氣に聲を振絞つて、

『貴所。』と、絶叫した。

『何だ?。』

『どうか妾の心を刺して下さい。』と、云ひながら帯の間から錦襦地の袋に入つてゐる懷劔を取出して『さ、此の心臓を刺して下さいまし、而して流れ出る血汐には妾の操の色が浮いて居りませうから。』

「黙れ、那樣汚れた體を刺せば、汚れた血汐は眞白い雪もろとも我々親子の體を汚すのだ、勝手に突け、勝手に刺せ。」

雪江は恚う云はれて愈々決心の筋を固めて懐劍を逆にもち換へ、アハヤ己が胸を刺さうとしたのを、房江は馳寄つて其の手にシかと喰ひ附いた。

「あれ危ない、お父様、何故此の叔母様は死ぬの、どうか妾がおわびをしますから叔母様を勘辯して進げて下さいな。」

「房江寄るなく」と、守雄は雪江の手から房江を引離さうとしたが仲々離れない。

「可厭々々お父様、どうか叔母様を殺さないで頂戴よ。」

穂積は此の一言で張つめてゐた氣も挫けん許りであつた。

「ア、何といふ美しい心であらう、其處な畜生、今の一言を何と聞いた、あれが親を慕ふ思愛の情ぢやぞ、耻を知れ耻を、私や六年以來の事を思出すと、貴様たち親子の骨も肉も喰つても飽足らないんだ、ウヌ人畜生め。」

と、ムラ／＼と胸を突いて來た怒が、懷舊の情に煽られて雪江をハタと地べたに引倒した。

恰度、此の時であつた、破れた塀を越えて獵装束をした武村男爵と都築郁太郎の兩人が寺内へ入つて來たが、此の状態を視て、眞逆、娘や妻とは思はないが、婦人の難義と見て取つて矢庭に飛蒐りながら守雄を雪江の體から引離したのであつた。

「や、怖い叔父様。」と、房江は武村の顔を見るより鐘樓へ逃げた。

「お、貴様は武村。」と、穂積は思はず叫んだので、武村と都築は意外の思ひで雪江を視たが同時に「や、雪江。」

「お、お父様好い處へいらつしやいました。さ穂積さんの前で奈何か何事も懺悔を遊ばして下さい、而して再び立派な貴族の身分にして進げて下さいまし。」

「莫迦を云ふな、お前には内閣書記官長の都築といふ立派な良人があるぢやないか、恁麼處で體を冷しては可けない、さア私と一緒に歸んなさい。」

「いゝえ妾は歸りません。」

「はゝア成程。」と、武村は穂積の方を顧みながら軽く頷いて「おい穂積、貴公は喰ふに困つて、雪江を欺き恁麼處へ引張り出し舊情を

暖めやうといふのぢやらう、イヤ雪江を欺いて衣食の資料を獲やうといふのぢやらう、何といふ意久地なしぢや、那樣了簡ぢやからいつまでも禮遇停止の解除がない、貴公は男か女か、莫迦者め。」

穂積守雄は最う我慢が出来ない、つと進んだと思つたら短い聲で

「武村。」

「何かな。」と、澄したものである。

「喰ふ物が好んばなくとも、貴様の物一滴でも手につけるもんか、私の望むのは冷酷極まる人鬼の首だ。」と、守雄は雪江の手から行成懷劍を奪つて武村に斬つけたが、其れと同時に、傍にゐた都築は銃の臺尻で穂積の向ふ脛を打つたので、あつと叫んで守雄は倒れた、武村は懷劍を奪ひ返さうと思つて銃を地べたへ置いたのを、そつと

雪江は其れを取つて引金を引いたから一發の銃聲が寂寞たる寺内に轟くと一緒に、父の武村輝國は絶叫してバタリと斃れて了つた。

「お、雪江、貴様はお父様……。」と、都築は狂氣の如く雪江に飛蒐つて捻伏せると、房江は幼心にも都築が憎く、父の寄雄のもつてゐる懐劍を取つて後から都築の脊中を力任せに突き刺した。

都築は不意に遣られたので仰向けに倒れると雪江は、房江の懐劍握る手をシカともつて都築の肺部を力籠めて刺貫いた、都築は空をつかんで絶息して了つた。

それを視た穂積守雄は餘りの慘狀に、足部の痛さを忍んで摺寄つたが、雪江は萬事休矣と觀念をして返す及に己が乳の下をグサツと許り突き刺した。

「ア、叔母様。」と、房江は雪江に取絶つた。

雪江は苦しい息の下から房江を抱き寄せながら守雄を見て「あなたこれで奈何か妾の罪を赦して下さいまし。」

「解つた、雪江、お前の罪は赦して遣る、房江、此の叔母様は仍旦お前のお母様だぞ。」

「お母様。」と、房江は待兼てゐたやうに絶つた、雪江はシカと抱いて「房様。」

少時、親子三人は悲歎の淵に沈んでゐた、今日を名残の夕暮の鐘が物さびしく聞える。

「貴、貴所、今が夕暮、あの鐘は妾を導く因導です、此の世の名残親と良人を殺した供養の鐘に奈何か彼の鐘を撞して、下さいまし。」

穂積は頷いて房江と一緒に雪江を鐘樓に扶け上げて撞木をシカと握らせた。

『もし貴所。』と、雪江は絶えなくする息の下から『もしも鐘の響がやんだ時は、妾の心の響もとまつた時と思つて下さいな。』

『それぢや其の時がお前の命の玉緒の止つた時なのだね。』
雪江は莞爾として一つ鐘を撞いた、其の嬌々たる響の餘韻には親子の別離を惜む無限の恨が籠つてゐる。

ゴーン、ゴーン、ゴーン、房江は母の斷末魔に撞く鐘の音を指折つて數へてゐたが、雪江は恰度八ツ撞いてバタリと倒れて了つた。

『お父様、お母様は八ツ撞いてよ、恰度、妾の歳と一緒にだわねえ。』

『お、お前の年を數へて撞いたのか、それとも息の根が絶たたのか。』

『最うお母様は死んで了つたの。』と、房江は馳け寄つて母の遺骸に取違つてワット許りに泣き顔れて了ふ。

ア、雪江は最う此の世の人ではない、而しながら八ツの鐘の響は、やがて親子二人が暗い世の中から、明るい社會へ出られる因導の印であつたのだ。

大正三年三月七日印刷
大正三年三月十日發行

▲響▼
【定價金參拾五錢】

著者 小島孤舟

東京市日本橋區龜船町六番地

發行者 磯部辰次郎

東京市神田區松住町五番地

印刷者 菅井十一郎

東京市神田區松住町五番地

印刷所 碓文舍

不許
複製

發行所

東京市日本橋區
鐵砲町六番地

磯部甲陽堂

振替東京一五〇五六番

小島孤舟君著 ■ 渡邊悟光君畫

小怪美人

四六判全一冊
五百七十六頁
定價金六拾錢
郵税金八錢

艶麗花を欺く容姿、たとへば異國に培はれし大和撫子の、露をも厭ふ風情に憧れて其の香に酔集ふ百蝶の群、朝に夕に變幻出沒、其の進退に眼眩んて怪美人と呼ぶ、一度巻を披けば其の奇其の妙宛から迷宮に入るの思あらむ、而かも此の不可思議なる美人の告白を讀めば紅淚潜々先づ卷上に滂沱たらむ。

小島孤舟君作

■ 渡邊悟光畫伯裝幀及口繪

傑作 小新橋情話

前編 四六判上製
後編 四六判上製

各一冊正價金五十錢 郵税金八錢

川尻清潭序

演藝書歌之助著

口繪

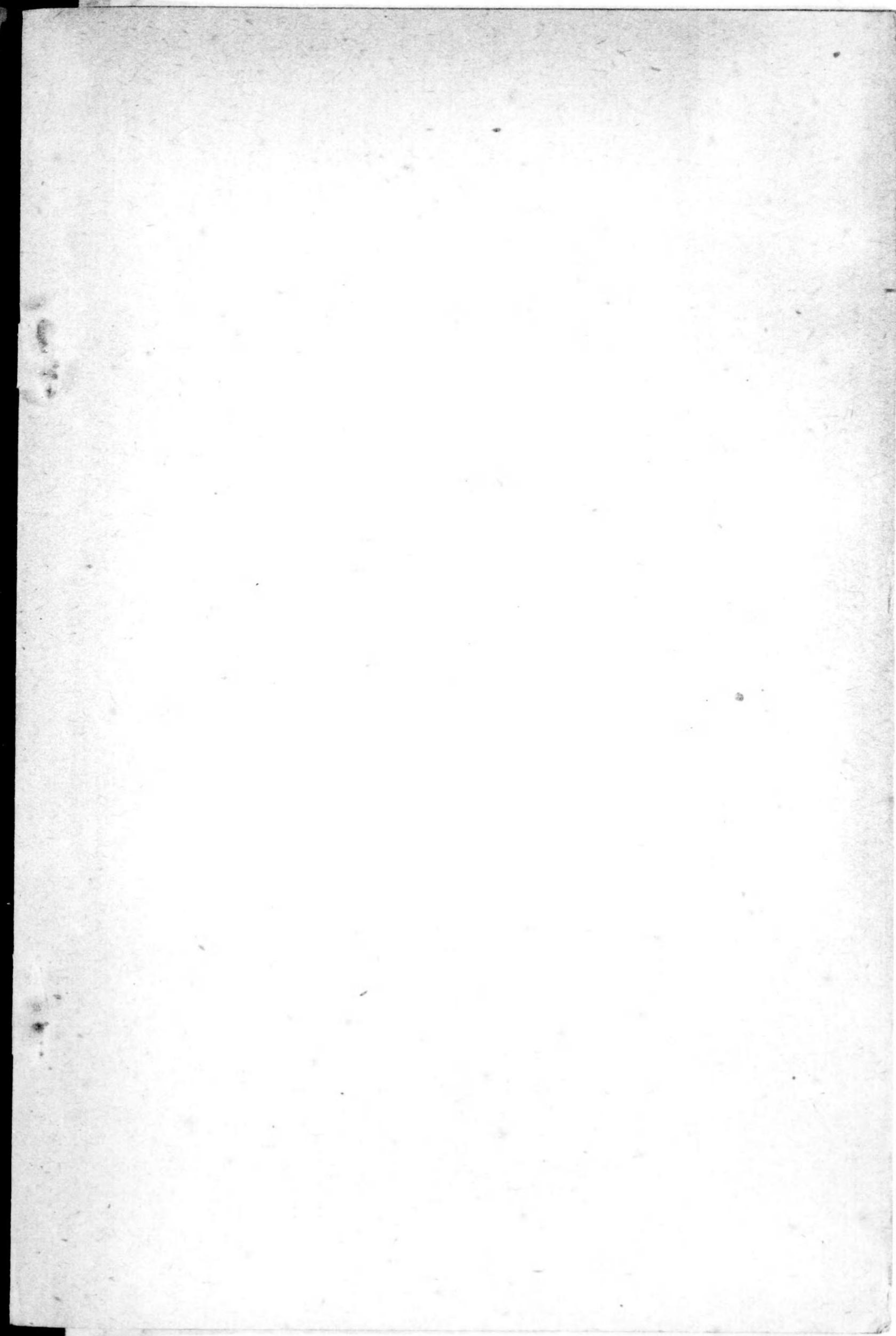
舞臺面扮裝
面寫真十葉
挿人

芝居見たま

四六判全一冊
裝幀瀟酒
五頁
正價金八十八錢
送料金八十錢

本書は何れも當代の名優に依つて演じられた芝居を擇んで書いたものでござい
ます。一度御覽になりました芝居を、あれは、どんなだつたかとお考へになる事
があります。そこで其處に非常な興味があると信じます。直にハツキリと解つて參
りません。それは役者の顔こそ見られぬ方に、こんな重寶な本はあ
りません。其の芝居の氣分が「見たま」に浮動してゐますが、讀者の聲こそ聞えませんが、
不思議に芝居の世界に引きこまれて參ります。讀むでゐらッしやるうちに
本書は素的に面白本でございませう。又お話の材料にもならうと信じます。何
故とならば「見たま」其物が、平易に、簡潔に、そして興味のあるやうに、丁度
お話をするやうに書いてあるからでございませう。然かし、これを芝居の筋
書だと思召したら、大間違でございませう。著者は何人にも讀まれるやうに、又
小説なぞと同じやうに、何處迄も興味中心で書いた讀物だと申して居ります。

270
221



終

